

追 悼 文

故 藤原 公策 先生

東京大学助教授 (1962年～1970年)

東京大学教授 (1970年～1988年)

日本大学教授 (1988年～1998年)

東京大学名誉教授

中国協和医科大学名誉教授

日本農学賞受賞 (1985年)

「Tyzzer 病の感染病理学的研究」



故西山保先生らと一緒に日本毒性病理学会の創設に中心的な役割を果たされ、その後も本学会の発展に多大な貢献をされた藤原公策先生が、平成17年9月22日にご逝去（享年77歳）なさいました。その日、私は韓国獣医学会に参加するため済州島に赴いたばかりで、同行の学生達を置いて帰国することもならず、先生の告別式には出席出来ませんでした。常に学生のことを中心に考えておられた先生はきっと許して下さっていることと思います。

先生は昭和25年に東京大学農学部畜産学科を御卒業後、大学院を経て、東京大学伝染病研究所、東京大学医科学研究所および東京大学農学部の教官として学生の教育と研究に従事され、昭和63年3月に東京大学を退官されました。その間の先生の研究業績は広範・多岐にわたっていますが、なかでも動物の感染症、特に細胞内寄生体による感染症に関する研究に精力的に取り組まれ、昭和59年には「Tyzzer 病の感染病理学的研究」で日本農学賞を受賞されました。先生はこのような基礎的研究と平行して、応用面においても動物飼育群における感染症汚染のコントロールに有用な多くの技法を開発され、我が国の実験動物の品質向上に大いに貢献されました。

私が最初に先生の聲咳に接したのは、畜産獣医学科4年生時の家畜伝染病特論のなかの細菌病の講義で、当時先生は医科学研究所の助教授でしたが、非常に面白い講義であったことを記憶しています。大学卒業後は色々な学会でお会いする機会があり、そのうちに学位論文をご高覧頂き、最終的に先生のお薦めで大学（農学部実験動物学教室）に戻る事になりました。私が大学に戻って数年の間、先生は医科学研究所と農学部の教授を併任されており、折に触れては学生に論文を書かせる事の大切さとともに、ご自分の教室の論文数の多さを語っておられました。最初は反発しつつも、何時の間にかこの点に関してだけは先生に負けまいと思いつめたのも、今にして思えば先生の深慮遠謀であったのかも知れません。また、先生は、向学心に富む若者には、教室の卒業生と否とを問わず、広く門戸を解放しておりましたが、この点も勝手に真似をさせて頂きました。

ともあれ、東大在職中の先生は教室を挙げて感染病理学を展開されておりましたが、東大を御退官後日本大学に移られてからは、一転して伴侶動物の診断病理学に関する教育・研究に集中されました。私を含め、日本毒性病理学会には、東大および日大時代を通じての先生の弟子や孫弟子が大勢いますが、毒性病理学の発展に些かなりとも貢献する事で先生のご恩に報いたいと願っています。

先生は、教育・研究以外にも、大学行政、政府関連の審議会や委員会さらには多くの学会で指導的役割を果たして来られ、その交友関係は、国の内外を問わず、広範囲に及んでいました。そのことは、平成17年11月26日に開催した先生を偲ぶ会にお集り下さった方々の内訳と人数からも容易に察せられます。私などは先生にとっては最も生意気な部類に属する弟子の一人であったと自認していますが、それも実際のところは、先生の掌で遊ばされていたに過ぎないのかもしれない。

ここに改めて藤原公策先生のご冥福をお祈り致します。先生、どうか安らかに御休み下さい。

(土井 邦雄)